

建築探訪(光支部)

光支部 中岡 晃一

新緑の色増す季節となりました。爽やかな風に誘われ、思わず外へ足を運びたくなるような心地よい日々が続いております。私にとっては、一年の中で最も好きな季節です。そんな中、社内の有志にて熊本県へ建築作品の見学に参りましたので、その内容をこちらで紹介させていただきます。

初日は、安藤忠雄氏の設計による「こども本の森 熊本」を訪れました。この施設は、「子どもたちに本に親しんでもらい、豊かな感性を育てほしい」という氏の願いから、自ら設計・建設し自治体へ寄贈するという形で誕生した子ども向け図書館です。大阪の中之島を皮切りに全国各地で展開されており、熊本もその一つとして注目を集めています。



外観は、コンクリート打放しの外壁に、木造のヴォールト屋根が組み合わされています。内部の本棚の傾斜がそのまま外壁のラインに現れており、屋根の描くアーチが建物全体に柔らかな印象を与えていました。西側には隣接する公園の景色を取り込む大きな開口とテラスが広がっています。内部に足を踏み入ると、壁面全体が巨大な本棚となっており、緩やかな曲線を描く平面形状と相まって、本棚そのものに空間全体が包み込まれているようでした。以前、東大阪市の「司馬遼太郎記念館」を訪れた際も、壁一面を埋め尽くす本

棚に圧倒された記憶があります。しかし、今回はどちらかと言えば住宅に近い親密なスケール感であったため、非常に落ち着きのある、居心地の良い空間に感じられました。



二日目は、大西麻貴+百田有希 / o+h による「熊本地震震災ミュージアム KIOKU」を訪れました。この施設は、南阿蘇村の旧東海大学阿蘇キャンパス内に開館した、熊本地震の経験と教訓を後世に伝えるための施設です。



山並みに呼応するように配された緩やかなカーブを描く屋根がとても美しく、外壁や床のコンクリートには、地域特有の「はんれい岩」の洗い出し仕上げが施されていました。建築が単なる施設としてそこにあるのではなく、阿蘇の大地と繋がっているようで、設計者が言われる「生き物や友人のように、人々に親しまれ、大切にされる存在」である建築を少し感じとることができました。

建築が人々のところに寄り添うことの大切さに改めて気づかされた充実した見学会でした。